

ライプニッツ試論

——原子論（アトミズム）から单子論（モナドロジー）へ——

黒 崎 宏

はじめに

17世紀から18世紀にかけての偉大なる数学者にして偉大なる哲学者であったライプニッツの、遺書ともいえる小さな短文集『单子論（モナドロジ）』と、それに論理的基礎を与えている彼の初期の著作『形而上学叙説』を読んで、私は、私なりに彼の思想を再構成してみた。使用したテキストは、以下の二書である。

ライプニッツ著河野与一訳『单子論』岩波文庫（1951年第1刷、1977年第15刷）

ライプニッツ著河野与一訳『形而上学叙説』岩波文庫（1950年第1刷、1997年第4刷）（以下では『叙説』と略記）

私にとって、なぜ今ライプニッツなのか、という事については、末尾の「おわりに」を読んでいただきたい。

河野与一訳は、両書とも実に誠実な名訳であって、全く信頼するに足る。解説も大いに参考になる。但し、いささか使用文字と言葉使いが古めかしい。そこで私は、引用にさいしては、それらをいくらか今風に改めた。また〔 〕は私の挿入である。

1.

「单子（モナド）」とは、単一実体のことである。ここに「単一」とは、たとえ内部構造を有するとしても、全体として一なるもの、のことである。それを表す概念を有するもの、のことである。そして「実体」とは、「個体的実体」のことであり、論理的には、完足概念を有するもの、のことである。

ここに「完足的概念」とは、真としてそれに属する述語をすべて有する主語概念、のことである。したがって「单子」とはたんに、完足的概念を有するもののことである、と言える。完足的概念を有すれば、それを表す概念を有するのであるから、そこには、全体として一なるもの、という事が含まれているからである。

完足的概念を有するものは、種的存在ではありえない。それは、この宇宙において、唯一の存在である、即ち、唯一なるもの、である。したがって結局、こういう事になる。「单子」とは、完足的概念を有するもの、のことである。それは、この宇宙において唯一なるもの、である。そして、この逆も正しい⁽¹⁾。

(1) ライプニッツはこう言っている。すべて真の述語設定が事物の中に何か根拠を持っているという事は、常に本当である。或る命題が自同的でない場合、即ち、述語が表明的に主語の中に含まれていない場合に、述語は主語の中に潜勢的に含まれている筈である。これを哲学者は「内在」と称し、「述語は主語の内に在る」と言う。そこで、主語は常に述語を含んでいなければならない。その結果、主語の意味を完全に理解する者は、また、「この述語はこの主語に属する」という判断を下すことになる。そういう次第であるから、個体的実体(单子)、即ち完足的なものは、その本性上、「それを表す概念の属している主語に含まれているすべての述語を理解するに足り、また、そこからそれらの述語を演繹して来るに足りる位完足的な概念」を持っている、という事が出来る。(『叙説』第8章)(アンダーラインは引用者による。)

注：「完足的概念」(notion complete)とは、「完全に充足している概念」を意味している、と理解すればよい。これはライプニッツ独特の基礎概念である

から、独特の訳語が用いられているのであろう。

2.

単子の典型例は、人間の理性的精神である。動物が精神（動物的精神）を持っている事、そして、物体が実体として実体的形相を持っているという事は、認められる⁽¹⁾。植物が植物的精神を持っているという事も、認められてよいであろう。動植物の精神や物体の実体的形相は、人間の理性的精神よりも不完全ではあるが、やはり一種の精神である、と言ってよいであろう。

しかし、動植物の精神や物体の実体的形相は、自分が何であるか、という事も、自分が何をしているか、という事も知らず、したがって、反省するという事がない。それ故、動植物の精神も物体の実体的形相も、倫理的性質を持つ事が出来ない。（『叙説』第34章を参照）

これに対し人間の理性的精神は、自我を自覚し、同一人格を保持している。したがってそれは、懲罰の対象にもなるし、褒賞の対象にもなる。

(1) ライブニッツはこう言っている。実体の本性について深く考える人には、物体は、形而上学的厳密を以て言うと、実体ではない（これは実際プラトン派の人の意見であった）という事か、もしくは、[形而上学的厳密を以てではなく言うとすれば] 物体の本性全体が、ただに拡がり即ち大きさ、形および運動からばかり成り立つものではなく、精神と関係のある何物かを、そこに必然的に認めなければならない、という事が分かるであろう。この何物かは、仮に動物の精神というものがあるとすれば、その精神と同様に、現象に少しも変化を及ぼすものではないけれども、一般に実体的形相と称しているものなのである。（『叙説』第

12章)

3.

西洋哲学では、古代以来、それ以上分かつ事の出来ないもの——「不可分割者」——を、「原子（アトム）」と言ってきた。概念上では、数学的な意味での「点」が、それに当たる。しかし、点をいくら集めても物体が出来るわけではないから、原子を点と考える事は出来ない。したがって原子としては、微小なりといえども、有限な大きさを持った限りなく硬いものを、考えなければならない。したがってそれは、概念上は、不可分割者ではない。即ち、本来の意味での原子ではない。では、本来の意味での原子——不可分割者——は、存在しないのか。存在する。それが単子である。ライプニッツに従えば、そうなる。ライプニッツは、こう言っている。単子は「自然の本当の原子」であり、一口で言えば、「事象の要素」である。（『単子論』第3章）

4.

さきに私は、単子の典型例として、人間の理性的精神をあげた。しかしもっと分かりやすいのは、人間の身体である。そこで今ここに、単子の具体例として、私のこの生身の身体を考えてみる。

私の身体は単子である。それはこの宇宙に、あとにもさきにも、唯一つしかない。しかしそれには、脳があり、心臓があり、肺があり、肝臓、腎臓、等々があり、要するに、多くの臓器がある。私の身体は、多くの臓器によって構成されているのである。

その事を今、「Sはa, b, c, d, ...によって構成されている」と言うことにする。この場合、Sは、「a, b, c, d, ...に分解できる」と言う事は出来るが、「a, b, c, d, ...に分割できる」と言う事は出来ない。何故か。

Sをa, b, c, d, ...に分割するという事は、Sを跡形もなく消してしまって、a, b, c, d, ...を、Sとは関係なしに、それ自体として理解しようとする、という事である。そうすると、例えば私の脳は、もはや私の脳という意味を失い、「脳」という意味さえも失って、ただの奇妙な、まったくグロテスクな物体に化してしまう。物体Xに化してしまう。他の臓器についても全く同様である。そして、それら意味不明な物体たちを集めても、そこに「私の身体」という意味を有するものが生まれて来はしない。それは依然として、意味不明な複合体にすぎない。

これに対し、分解の場合は違う。「分解」という言葉の良い例が、数学における「因数分解」(より正しくは「素因数分解」)である。例えば、165という数は、1.3.5.11というように、4つの素数の積の形に分解される。このように、或る数を素数の積の形に分解することを「因数分解」と言う。そして、この例から明らかなように、因数分解とは、或る数を素数に分解すると同時に、(積の形で)それらを繋げることなのである。ここにおける分解は、同時に(積の形での)結合なのである。さきの例で言えば、Sを「a, b, c, d, ...に分解する」という事は、同時に、Sは「a, b, c, d, ...の(積の形での)結合である」という事を示す、という事なのである。これは、私の身体は「私の脳、心臓、肺、肝臓、腎臓、…の(有機的な)結合である」という事であり、これは全く自明な事に他ならない。一見奇妙に思われるかもしれないが、ここにおける論理は、分解即結合なのである。分解なくして結合なく、結合なくして分解なし、なのである。

5.

私の身体は単子である。それは、この宇宙において、あとにもさきにも唯一つしかない。そして同じことが、私の全ての臓器についても言える。ということ、単子（私の身体）は、多くの単子（私の脳、心臓、…）によって構成されている、ということである。ここにおいて単子は、入れ子構造をなしている、と言えるのである。単子は多くの単子による入れ子構造によって構成されているのである⁽¹⁾。

「入れ子構造」を認める事が、単子論のキーポイントである、と思う。我も汝も単子である。汝は我の中にあり、我は汝の中にある。この入れ子の相互性が、単子間の基本構造である。そして最大の単子は、精神世界においては神であり、物体世界においては宇宙である。では、最小の単子は何か。それは、精神世界においては、無限小なるものの実体的形相であり、物体世界においては、無限小なるものであろう。それが何であるかは、われわれ人間には分からない。しかし神の眼には、はっきり見えているのであろう。神においては、全てのものが単子であり、宇宙は単子の巨大なマトリョーシカなのである。

念のために、少し追記する。「汝は我の中にあり、我は汝の中にある」という、この入れ子の相互性は、空間的模型で示すことは不可能であろう。メービスの帯もクラインの壺も、役に立たない。強いて言えば、鏡である。単子は「生きた鏡」などとも言われるが、それとは違った意味で、私が鏡の前に立つ。すると私の姿が、前後左右を反対にして、鏡の中に映る。そこで、鏡のこちら側を我的世界、あちら側（鏡の内部）を汝の世界とすれば、我は汝の世界の中にいるが、その汝の世界は我的世界の中にあるのである。

- (1) ライブニッツはこう言っている。生物の身体には、それぞれ主となってそれを支配しているエンテレケイア [(それを実体にする形相——実体的形相——)] があり、動物においては、それが精神 [(動物的精神)] だ、ということが分かる。ところで、この生物の身体の分肢には、他の生物植物動物が充ちていて、その各々が、またそれぞれ主となって、それぞれを支配しているエンテレケイアもしくは精神を持っている。(『单子論』第70章)

注：動物の中に植物があるという事は不自然だ、と思われるかもしれないが、ライブニッツにおいては、動物と植物の区別は本質的ではない。そして実際、動物の中に、カビのような植物的なものも存在している。

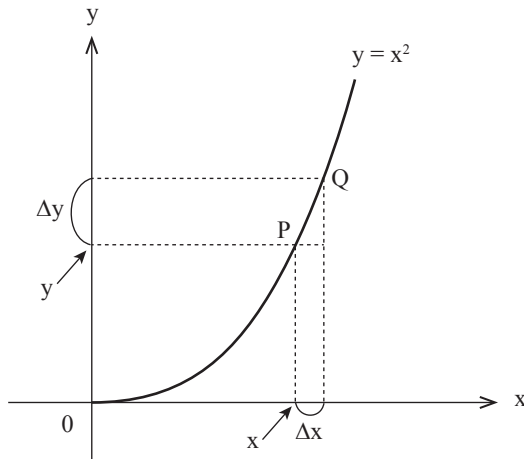
6.

我々は、この宇宙に不可分割者を求めて、单子に到着した。それには、私の精神のような心的なもの、私の身体のような物的なものがあった。しかし実は、数学の世界にも、不可分割者がある。それは、「無限小」という概念で表わされるものである。ゼロではないが有限でもない「無限小」という概念で表わされるもの、なのである。

一例をあげる。

$$y = x^2$$

という放物線がある。その上に $P(x, y)$ という点をとる。その少しさきに Q という点をとる。 Q の座標を $(x+\Delta x, y+\Delta y)$ と表す。すると割線 PQ (これは図には描いていない) の傾きは、



$$\frac{\Delta y}{\Delta x}$$

となる。そこで Δx を限りなく0に近づける。すると同時に Δy も限りなく0に近づく。そしてこの場合、割線PQの傾きは、限りなく点Pにおける放物線の接線（これも図には描いていない）の傾きに近づく。したがって、点Pにおける放物線の接線の傾きは、

$$\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x}$$

と書く事が出来る。これは、 Δx を限りなく0に近づけるときに、

$$\frac{\Delta y}{\Delta x}$$

が限りなく近づいてゆく目標値を表している。このことを具体的に書くと、こうなる。

$$\begin{aligned}
 \lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x} &= \lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{(x + \Delta x)^2 - x^2}{\Delta x} \\
 &= \lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{x^2 + 2x\Delta x + (\Delta x)^2 - x^2}{\Delta x} \\
 &= \lim_{\Delta x \rightarrow 0} (2x + \Delta x) \\
 &= 2x
 \end{aligned}$$

x を限りなく 0 に近づけると、 $(2x + \Delta x)$ は限りなく $2x$ に近づいてゆくからである。この場合の $(2x + \Delta x)$ の目標値は $2x$ であるからである。そして、もしもここで $x = 1$ とすれば、P (1, 1) における接線の傾きは 2 である、という事がわかる。

このように、

$$\lim_{\Delta x \rightarrow 0} \frac{\Delta y}{\Delta x}$$

は、ある目標値に限りなく近づいてゆく。その目標値を一般に

$$\frac{dy}{dx}$$

と書いて、上から「ディーワイ ディーエックス」と読む。今の場合、

$$y = x^2$$

であるから、

$$\frac{dy}{dx}$$

は

$$\frac{dx^2}{dx}$$

となり、その値は $2x$ なのである。ここに現れた dx とか dy は、一般的に言っ

て、ゼロではないが有限でもない無限に小さい数（無限小）を表している。それらは、ゼロではないが、いかなる数よりも小さい数なのである。これは丁度、無限大（ ∞ ）が、いかなる数よりも大きい数を表しているのと、対極である。無限大が一定の数ではないように、無限小も一定の数ではない。無限大が、いかなる数をも越えて大きくなってゆく生き物を思わせるように、無限小も、いかなる数をも越えて小さくなってゆく生き物を思わせる。そして、そのような dx や dy を使った計算のシステムが「微分法」に他ならない。

微分法の代表的な使用例が、先にあげた接線の傾きの計算であるが、もう一つの代表例が、運動物体の瞬間速度の計算である。先の例を用いれば、 x を出発からの経過時間、 y を出発点からの通過距離とすれば、

$$y = x^2$$

という方程式で表わされる運動をする物体の、各時点での瞬間速度は、

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dx^2}{dx} = 2x$$

であるから、 $2x$ なのである。そして、出発から時間 1 だけたった時の、その物体の瞬間速度は 2 なのである。（単位は適宜とって。）このような微分法は、ニュートンとライプニッツによって、それぞれ独立に発見された。

さて、このような、生き物のような無限小 dx 、 dy も、不可分割者ではないであろうか。例えば、 dx を真中で二つに分割しようとするれば、 dx は、あっという間にその刃先をかいくぐって、半分以下の小ささになってしまうであろう。

もっとも無限小には、初めから「半分」という概念が当てはまらない。無限小の半分も同じ無限小なのであって、したがって、たとえ無限小を半分に切っても、切ったことにならないのである。そしてその意味でも無限小は、

不可分割者なのである。

このような、数学的概念としての無限小は、単子ではない。宇宙を構成している実体ではないのであるから。しかし、宇宙を構成している実体としての無限小なるものがあるとすれば、それは単子である、と言えるであろう。それが具体的に何であるかは、我々人間には不明であるが。

ここで一言注意しておきたい。dx や dy には \lim (リミット、limit、極限) という概念が内在している。そして更に、dx には dy という相棒が、dy には dx という相棒が、内在している。無限小として dx だけ、dy だけを考えても、意味がない。それでは、ただ無限に小さくなるだけであって、だからどうした、という事になる。dx を無限に小さくすれば、それに伴って dy も無限に小さくなるが、しかし両者の比 dy/dx は、有限な一定の値に限りなく近づいてゆく。そこにはじめて、dx とか dy とかを考える意味があるのである。

7.

単子には、心的なものと物的なものがある。具体的には、私の精神と私の身体である。では、この両者の関係はどうなっているのか。いわゆる「心身問題」である。

デカルト (1596-1650) は、この両者の関係は松果腺という器官を通して行われる (松果腺説)、と言い、その弟子筋のマルブランシュ (1638-1715) は、神が機会に応じてその都度介入する (機会原因説)、と考えた。これらに対してライブニッツ (1646-1716) は、精神と身体は全く独立しており、それぞれ独自の法則に従って展開している、という「併起説」を唱えた。これは、イメージとしては、心の世界と物の世界は、宇宙創造の初めにおいて、独立

に、同時並行的に立ち上がった、というものである。しかし、それにもかかわらず、精神の現象と身体の現象は完全に対応しており、それは、神による予定調和のおかげなのである⁽¹⁾。

私の身体には、確かに松果腺という器官があり、何らかの働きをしているが、それが私の精神と身体の間を取り持っているとは、到底考えられない。エネルギー保存の法則からも明らかなように、物の世界は物の世界だけで閉じており、完結しているのであって、したがって、身体の器官は身体にしか働けないのではないか。また、精神と身体の間には神が介入するという事も、考えられない。例えば身体は、身体の生理学的法則に従って動いているのに、そこに神は如何にして介入出来るのであろうか。この場合、私の身体は、生理学的法則に従うのをやめて、神の作用に従うのであろうか。これは、全く考えられない事である。もしもそうだったとすれば、それは一種の奇跡であろうが、いくら神でも、そんな奇跡の乱発は不可能であろう。それでは、奇跡が奇跡でなくなってしまう⁽²⁾。かくして結局、デカルトの「松果腺説」もマルブランシュの「機会原因説」も否定される。

では、ライプニッツの「併起説」はどうであろうか。これは、一見荒唐無稽に思われるが、よく考えてみると、今日の我々にとっても、結構理にかなっている。全知全能な不動の動者——神——の存在だけを仮定すれば、併起説は論理的必然のようにも思われる。話の筋は、以下ようになる。

先ず第一に、厳然たる事実として、私には精神と身体がある。私の精神は精神の世界に属し、私の身体は物体の世界に属している。精神の世界は精神の世界の法則に従っており、物体の世界は物体の世界の法則に従っている。精神にしる物体にしる、ものの事象——例えば、ものが動く、という事——は、一瞬前の事象の結果であり、一瞬後の事象の原因である。これらの間の

関係を表しているのが、その事象の「基本法則」と言われるものである。それは、「一瞬前カクカクであったから、今シカジカである」というわけである。あるいは、「今カクカクであるから、一瞬後はシカジカであろう」というわけである。したがって、現在の事象には、その原因として一瞬前の事象があり、その一瞬前の事象には、その原因として、更に一瞬前の事象があることになる。かくして、ものの事象の原因となる事象を求めてゆくと、限りなく過去の事象へ遡ることになり、これには限りがない。しかし、限りがないのはおかしい。現実の事象に至る系列には、どこか始まりがあるはずである。始まりがなくては、何事も始まらないのではないか。では、その始まりとは何か。それには、論理的に言って、もはや原因があってはならない。それは、無原因でなくてはならない。アリストテレスはそれを「第一原因」とか「不動の動者」——自身は動かずして他を動かすもの——と言った。そしてこれが、アリストテレスの神であり、ライブニッツの神でもあった。そして我々も、これを「神」と言うことにする。かくして我々は、論理的に、精神の世界の不動の動者たる神と、物体の世界の不動の動者たる神を、想定せざるを得なくなる。そして勿論、これらの神は同一である⁽³⁾、と言わざるを得ない。

では神は、どの様にこの宇宙をスタートさせたのか。今日の言葉で言えば、どの様にして（137億年前に？）ビッグバンを起こしたのか。

神は先ず原初の宇宙を、或る一定の初期条件のもとで、一撃をもってスタートさせた。しかし、如何に全能な神といえども、法則に逆らうことは出来ない。確かに神には、法則を作る自由はあるかもしれない。例えば現実には光の速度は、 3×10^{10} cm/sec であるが、これを、 1×10^{10} cm/sec にすることは出来たかもしれない。しかし、如何に全能な神といえども、或る法則が一

度設定されてしまえば、もはやその法則に逆らう事は出来ない。そして神は、その法則に従って、未来を予測するのである。法則なしには、神といえども、未来を予測する事は不可能なのである。

では、法則に従って、即ち、法則を用いて、未来を予測するとは如何なる事か。この場合に用いられるのは、基本法則と言われるものであるが、それは、先に述べたように、「今カクカクであるから、一瞬後はシカジカである」という事を述べているものである。そして、この予測を無限に繰り返してゆけば、或る有限の時間後の状態を予測する事が出来るのである。「一瞬後」とは、ゼロではない無限小の時間後のことであり、さきの微分法の表記法に従えば、「dx」——あるいは、今は無限小の時間であるから「dt」——と書かれるものであって、そのような一瞬後の状態の予測を無限に繰り返してゆけば、或る有限時間後の状態が予測出来るわけである。そしてその計算法が、「積分法」と言われるものであって、これもまた、ニュートンとライプニッツによって独立に発見された。この積分法の発見によって、先の微分法の適用範囲が一挙に拡大された。

しかし、積分法は法則ではない。それは数理であり、その本質は論理である。そして神は、法則のみならず、なお一層のこと、論理にも逆らう事が出来ないのである。法則は、論理の上に成り立っているのであるから、である⁽⁴⁾。

(1) ライプニッツはこう言っている。精神は精神自身の法則を持ち、身体は身体自身の法則を持っている。しかも精神と身体とが一致するのは、あらゆる実体の間に存する予定調和によるためであり、それはまた、実体が元来ことごとく同一宇宙の表現だからである。(『单子論』第78章) この仮説 [(「予定調和」の説)] によると、物体は物体であたかも精神というものが無いかのように (これは不可能な仮説であろうが) 作用し、

精神は精神で物体というものが無いかのように作用し、しかも両方とも互いに作用を及ぼし合うかのように、作用する。(『单子論』第81章)

- (2) ライブニッツはこう言っている。神の意志もしくは行いは、通常なものと同様なもの(奇跡)とに分けるのが普通である。しかし、神は秩序(法則)を外れるような事は一つもしない、と考えるべきである。だから、異常だと言われているものは、ただ神の造った物の間に設けた或る特殊な秩序から考えて異常だ、というに過ぎない。普遍的秩序には、全てのもものが適っているからである。これは、極めて真実であって、ただにこの世界において絶対に不規則なものが起こらないばかりでなく、誰も、絶対に不規則なものを虚構することさえ、出来ないくらいである。例えば、今誰かが紙の上に多くの点を打つとする。土を地上に撒き散らして、その像で占う馬鹿げた術があるが、あれを行う人のように、出鱈目に点を打つとする。それでも私は、「一定の法則にしたがって恒常一様な概念を有し、このすべての点を、しかも手でそれを打った順序に通るような幾何学的な線を見出し得る」と言うのである。もし誰か筆を離さず続け様に、直線になったり、円になったり、他の性質を持つ線になったりするような線を引いたとしても、この線のすべての点に共通な概念、法則、または方程式を見出し、それによって、これと同じ変化が起こらなければならない事を理解することが出来る。また例えば、人間の顔にも、その輪郭が幾何学的な線に適っていないで、一定の規則的運動によって一遍に引くことの出来ないような顔はない。しかし、規則が非常に複雑になると、それに適うものは、かえって不規則だと言われる。それであるから、「神がこの世界をどんなに造ったとしても、世界は常に規則的であって、一定の普遍的秩序に従っている」と言う事が出来る。(『叙説』)

第6章)

注：ここに我々は、ライプニッツが如何に全ての事を理性的に考え抜いていたか、という事を見ることが出来る。この点においては、デカルトは、いまだ道半ばであった。

(3) ライプニッツはこう言っている。神は一つしかない、且つ、この神だけで十分である。(『单子論』第39章)

注：一神教においては、「神は一つしかない」というのは当然である。そもそもライプニッツの哲学的思索の根底には、カトリックとプロテスタントの和解、更には、プロテスタントの内部での、ルター派とカルヴァン派の和解、という目的があり、彼は終生それに尽力した。ライプニッツ自身はプロテスタントであったが、カトリックに深い理解を示し、彼の友人たちはみな、彼はカトリックに改宗するであろう、と思っていた。しかし彼は、プロテスタントとして、その生涯を終えた。

(4) ライプニッツはこう言っている。或る人のように、「永久真理は、神に依存しているから勝手なもので、神の意志のままになる」などと想像してはならない。デカルトはそう解釈したようである。…けれどもこれは本当には偶然的真理についてしか言われない。偶然的真理の原理は、…[神の] 最善なるものの選択ということになっている。(『单子論』第46章) 全て意志は何か「意志の理由」を前提し、この理由はもちろん、意志よりも前にある。私がお「形而上学や幾何学の永久真理、したがってまた、善、正義および完全の法則は、神の意志の結果に過ぎない」と説く他の哲学者たちの言葉は、全くおかしな言葉だと思ふのは、そのためである。これに反して私には、「こういう真理や法則は、神の悟性から出て来るもので、神の悟性は確かに神の本質と同様神の意志に依存し

ない」と思われる。(『叙説』第2章)

注:「意志の理由」は意志よりも前にある。その意味で、意志には自由はない。「自由意志」なるものは、存在しない。神において、意志は理由のしもべ(僕)なのである。そしてこれは、「十分な理由の原理」の必然的結果である。デカルトの神学が主意主義的であったのに対し、ライプニッツの神学は主知主義的であったのである。彼の神は、微積分法を完全にマスターし、それを自由に使いこなす全く理性的な神であったのだ。

8.

ライプニッツの思想を戴して、今日の我々が考えるとすれば、神は先ず原初の宇宙を、或る一定の初期条件のもとで、一挙にスタートさせたのである。この際、或る一群の法則を設定したとしても、一度設定してしまった後は、神といえども、その法則に従わざるを得ない。そしてまた、その法則の使用は、勝手なものではなく、完全に論理的でなくてはならない。即ち、いくら全能な神といえども、法則と論理には、自由はないのである。

では、神の自由はどこにあるのか。それは、初期条件の設定にあると思われる。如何なる初期条件を設定するかは、神の自由ではないのか。神は、法則と論理には完全に手足を縛られているが、初期条件の設定だけには、フリーハンドを持っているのではないか。

では、何を目安に、神は初期条件を設定したのか⁽¹⁾。それは、最善の世界が生まれるように、である。これが、ライプニッツの「最善観(オブティミズム)」と言われる世界観である。そしてこれは、善にして愛に満ちた神にとっては、至極当然な選択であろう。必然的な選択であろう。したがって、

万物万事には、全て理由があることになる。すべては、最善の世界を構成するため、なのである。そしてこれが、ライプニッツの「十分な理由の原理」と言われるものである。したがって、初期条件の設定においても、神にはやはり自由はなかったのである。

それにしても、なぜ神には、最善の世界を生むためには如何なる初期条件を設定すべきかが、分かったのか。それは、神は、どのような初期条件で一撃を与えれば、その後、その宇宙はどのように展開してゆくかを、限りなく遠い未来まで、そして限りなく細部に至るまで、見通せるからである。これこそが、神が全知である事の本質ではないのか。神は宇宙創造の初めにおいて、21世紀の今日の私が、如何なる精神と如何なる身体を持って、如何なる状況のもとで生活しているかという事を、その最深の細部に至るまで、見通していたのである。その意味において神は、宇宙創造の初めにおいて、限りなく遠い未来の宇宙まで、一挙に造ってしまったのである。この4次元宇宙全体を、一挙に造ってしまったのである。後は、その4次元宇宙が自ずと展開してゆくのを、静かに見守るだけなのである。「永遠の相の下に」見守るだけなのである。

そうであるとすれば、今日の私は、宇宙創造の初めにおいて、既に、はるか未来の20世紀から21世紀にかけての存在として、その4次元宇宙に存在していたのである。つまり、こういう事である。この私は、観念としては、宇宙創造の初めから神の観念の中にあつた。それは、時至り、授精でこの宇宙に現れ、死によって消える。しかし、神の観念の中においては、死後も永遠にあり続ける。或る時期宇宙に現れたものとして、死後も永遠にあり続ける。神の観念は永遠であり、神には忘却がないから。

したがって私は、神においては永遠なのである。しかし、生身を備えたそ

の実人生は、授精から死までであり、高々70年に過ぎない。100歳まで生きたとしても、そのうちの30年くらいは眠っているのであるから。死後も、眠っている。神によって創造された私は、神によって消されるのでない限り、永遠に眠り続ける。そして、眠っている限り、私にはこのような生身の身体は必要がない。たとえ、夢を見ているとしても。ましてや、死後の眠りにおいておや。

- (1) ライブニッツはこう言っている。神は、知恵によって最善なものを知り、善意によってこれを選び、勢力によってこれを生ずる。(『单子論』第55章)

注：今日の我々としては、「勢力によってこれを生ずる」という所に、「ビッグバンの一撃によってエネルギーが与えられ、これによってこの宇宙が生ずる」というイメージを重ねる事が出来る。特殊相対性理論によれば、質量の本質は、したがってまた物質の本質は、エネルギーなのである。したがって、ビッグバンの一撃によって巨大なエネルギーが与えられれば、それによって物質が生じ、物体の運動が生じるのである。そして、エネルギーは保存されるのであるから、かくして創造された宇宙は、新たにエネルギーが供給されなくとも、以後ずっと存在を持続するのである。とはいえライブニッツは、このような、今日我々が持っている「エネルギー」の概念を持っていなかった。そこで彼は、その代わりに、神は「神性 (Divinité)」を電光放射 (les fulgurations) する、という奇妙な事を考えたのではないか。何故ならライブニッツは、被造物 (单子) は、創造された後、それ自体では地力で自己の存在を持続することが出来ず、常に神による再創造を必要とする、と考えていたからである。この再創造を果たすのが、神から放射される神性なのではないか。だが、この放射された神性は一瞬のもので、エネルギーのように保存

されはしない。したがって神は、被造物の存在を維持し続けるためには、神性を不断に一瞬一瞬放射し続ける事が必要なのである。それは丁度太陽は、地球上の生命体を維持し続けるためには、光を不断に一瞬一瞬放射し続ける事が必要である、という事に似ている。

ライプニッツは、こう言っている。神だけが原始的な一即ち根源的単純実体であり、全て創造された即ち派生的な単子は、その生産物として、言わば神性の不断な電光放射によって刻々そこから生まれ来るものである。(『単子論』第47章)

これは神による、単子の存在に関する「不連続の連続創造説」である、と言えよう。これが単子の働きに関するでないところに注意！単子の働きに関しては、神といえども、一度その単子を創造した後では、如何なる影響も与える事が出来ないのである。

9.

存在している、という事は、記述されている、という事である。私が存在している、という事は、私が

the man who . . .

として記述されている、という事である。この記述がない限り、私は私として存在する事が出来ない。そのような記述がない場合には、私はたんに、訳のわからない奇妙な X、に過ぎない。したがって、私が存在している、という事は、私について真として言い得る述語を限りなく集めることによって、達成されるのである。即ち、私についての定足的な概念を構成する事によって、達成されるのである。したがって、私が存在している、ということは、

私は定足的な概念を有している、という事なのである。即ち、私には、私について真として言い得る全ての述語が内在している、という事なのである。したがって、私について真として言い得る全ての命題は、分析的なのである。そしてこの事は、すべての命題について言い得る。即ち、すべての真なる命題は、分析的なのである。この事は、すべての真なる命題を、数学的命題と同列に置くことである。数学化する事である。そしてこの思想は、当然、ライプニッツの初期の「普遍記号法」の理念と繋がっている。

言うまでもなく、すべての命題が分析的であるわけではない。真として確立しているすべての命題が、分析的なのである。1610年にガリレオ・ガリレイは、望遠鏡を木星に向けた。そしてそこに、(4個の)衛星を発見した。「木星には衛星(月)がある。」ガリレイがそう叫んだとき、この命題は、分析的ではない。総合的であった。そう叫んだ時の主語「木星」には、いまだ「衛星がある」という事が含まれてはいなかったから、である。しかし、ガリレイが木星に衛星を発見し、これが、幻ではなく、真として確立した後では、「木星」という主語には、「衛星がある」という述語が、「木星」の意味の一部として内在しているのである。したがって、そうなった後では、「木星には衛星がある」という命題は、分析的なのである。このように、真として確立している命題は、すべて分析的なのである。

ついでに一言。我々人間にとっては、ガリレイが木星に衛星を発見するまでは、木星には衛星は存在しなかった。言わば、ガリレイが「木星には衛星が存在する」と言った事によって、木星に衛星が生まれたのである。もちろん神は、宇宙創造の初めから、木星生成の或る段階でそこに衛星が生じる事を見通していたのである。そしてさらに、それが1610年にガリレイによって発見される事も、見通していたのである。

10.

私は精神と身体を有している。私は单子であるが、私の精神も私の身体も、单子である。

ところで、私の身体は私の感覚の中にある。私の視覚、触覚のみならず、私の身体感覚（痛みや疲れ、等々）の中にもある。要するに、私の身体は、私の精神の中にあるのである。また、私の身体の外にある外界も、実は、私の精神の中にある。それは、見られ、触れられ、等々して、存在しているのだから、である。私の身体を含めて、要するに物体は、実はすべて、私の精神の中にあるのである。物的世界は、宇宙創造の初めから、私の精神の中にすべて折り込まれているのであり、それが時とともに、次々と展開されて来ているのである。表出されて来ているのである。私の精神は、自己自身の原理に従って、自発的に宇宙を展開していることになる。この際、外部からの情報は、一切必要ではない。これが有名な「单子には窓が無い」という警句の意味である⁽¹⁾。単子は、自発自展で宇宙を表出しているのである。その意味で、単子は「宇宙の鏡」である、とも言われる⁽²⁾。

「单子には窓がない」と言うと、単子は真つ暗な暗室のように思われるかもしれない。しかしそこには、輝かしい宇宙の姿が映し出されているのである。

こう言うと、人はプラトンの有名な「洞窟の比喻」を思い出すかもしれない。しかし、プラトンの場合は、映し出されているものは虚像であるのに対し、ライプニッツの場合は、実像なのである。プラトンの場合は、映し出されるものは実物の単なる影であるのに対し、ライプニッツの場合は、真として内にあるものの表出なのであるから、である。さきに私はこう言った。「要

するに物体は、実はすべて、私の精神の中にあるのである。」したがって、物体に実体性を考えるとすれば、それは、私の精神の実体性に負っている、ということになる。したがって、ライプニッツがそう言っているわけではないが、私の精神を「第1次実体」と言えば、物体は「第2次実体」ということになる。そうすると、神は「第0次実体」(本源の実体)とでも言うべきか。

(1)「ライプニッツはこう言っている。单子には、物が出たり入ったりする事の出来るような、窓が無い。(『单子論』第7章)自然的には、何物も外から我々の「精神」(单子)の中に入って来ない。あたかも、我々の精神が外から来る使者のような形象を迎え入れるとか、我々の精神に戸口や窓があるとかいうように考えるのは、我々の持っている悪い習慣である。(『叙説』第26章)

(2)ライプニッツはこう言っている。単純な実体(单子)は、それぞれ、他の全ての実体(单子)に対して、それらを表出する関係を持ち、したがって、宇宙の永久な生きた鏡となっている。(『单子論』第56章)すべての実体(单子)は一つのまとまった世界のようなものであり、神の鏡もしくは全宇宙の鏡のようなものである。実体(单子)は、全宇宙を各々自分の流儀に従って表出する。言ってみれば、同一の都市が、これを眺める人の様々な位置に従って、色々に表現されるようなものである。であるから、宇宙は言わば、実体(单子)が存在するだけの数を以って倍される事になり、神の栄光も同様に、神の業に関する互いに異なった表現と同じだけの数を以って倍される事になる。(『叙説』第9章)

注：ライプニッツは、「表出する」(exprimer)と「表現する」(représenter)を、区別しないで用いている。しかし彼においては、それらは、本質的に内在するものを表に出す事であるから、「表出する」の方が適切である。

11.

単子は、それがたどるべき全歴史が既に決定しており、したがって神は、それがたどるべき全歴史を、一挙に見通しているのである。したがって神は、それがたどるべき全歴史を、一挙に語っているのである。内的に語っているのである。「内的に語る」ことなしには「見る」ことも不可能であるから。したがって神は、当該の単子に、言わば、それがたどるべき全歴史を、書き込んでしまっているのである⁽¹⁾。そして、時とともに、その書き込まれたものが、順次表出されてくるのである。これは絶対的決定論であり、絶対的運命論ではないのか。そのとおりである。ここにおいては、自由を言うことは、全く無意味である。大切な事は、自分自身を真剣に生きることである。自分自身の必然性を生き切ることである。「自由」と言えば、それこそが、真の意味での「自由」であろう。

単子論によれば、私の人生は、長く続く一本の道である。そして私その一本の道をほんのちょっとでも踏み外せば、即座に、私は私ではなくなってしまう。そして勿論、現実には、そんな事はあり得ない。現実のこの私の人生は、ただここにある——ただここにいやおうなしに存在する——のである。存在の最も根源的な意味において、存在するのである。私はその存在を「絶対有」と言う事にする。存在しない、という事が、絶対的な意味において、考えられないからである。私が存在しない限り、そもそも、こんな議論は出来ないのではないか。その意味で、私は論理的に存在するのである。

しかしこの絶対有は、完足的概念に支えられた有であり、それは同時に「絶対無」ではないのか。縁起的存在としての、即ち「空」としての、絶対無ではないのか。

単子の有は、完足的概念によって支えられている有である。他によって——宇宙の他の部分によって——記述されて存在している有である。したがって、単子の有は、大乘仏教の言葉を使えば、縁起によって存在している有、なのである。即ち、「空」なのである。単子は、実体であるとはいえ、他によらない独立存在としての実体の正反対、なのである。それは、何から何まで他によって存在する、「縁起的存在」である。他という縁によって起きる存在、なのである。我々はここに、ライブニッツの単子論が、図らずも、大乘仏教の縁起論の「空の思想」に通底する事を、見てとる事が出来る。

- (1) ライブニッツはこう言っている。各人の個体概念は、いつかその人に起きる事を、一度に合わせて含んでいるから、それを見れば、各々の出来事の真理のアプリオリな証明または理由や、なぜ或る出来事が起こって、別の出来事が起こらなかったのか、という事が分かる。…我々は、個体的実体の概念が、それに起こり得るすべての事を一度に合わせて含んでいるから、その概念をよく見れば、そこにその実体について真に言い得べき全ての事を見る事が出来る。丁度我々が円の本性の中に、そこから演繹し得る全ての性質を見る事が出来るようなものである。…我々の主張するのは、或る人に起こるべき全ての事は、丁度、円の性質が円の定義の中に含まれているように、その人の本性または概念の中に、既に潜勢的に含まれている、という事である。（『叙説』第13章）

注：「或る人に起こるべき全ての事は、その人の概念の中に、既に潜勢的に含まれている。」かく言うとき、或る人、即ちその人とは、the man who …として、その人に起こるべき全ての事が書き込まれている人、のことである。ここにおいて、the man who … が、言わば、その人の定義に他ならない。したがって、当然、そこには、その人がたどるべき全歴史が書き込まれている

わけである。

12.

ライプニッツの单子論には、その他にも色々な側面がある。まず第一にそれは、ラッセル・ワイトゲンシュタインの「確定記述の理論」の先駆である。单子には、それがたどる全歴史があらかじめ既に決定されており、したがって单子には、それがたどる全歴史があらかじめ既に記述されているのであって、それによって単子は単子であるのであるから、である。

この記述は、無限小の細部にまで及ぶ。これによって単子は、種的存在であることをやめ、この宇宙における唯一の存在になるのである。そして、これによって单子論は、機械論であることをやめ、有機体説になるのである。万物は有機体である、生きている、という事になるのである。

機械論の特質は、思考が有限な細部で止まる、というところにある⁽¹⁾。例えば、機械の一部として、歯車をとろう。歯車は、その素材の細部は問題にされない。一定の形、一定の硬さがあり、一定の耐久性があれば、それでよいのである。歯車の素材は、たんに一定の種類であればよいのである。歯車の素材部分は、もはや機械である必要がない。それは単に、例えば、一定種類の真鍮でありさえすればよい。

しかし生物を生物として理解しようとするれば、無限の細部に至るまで、問題にせざるを得ない。ここに、生物——有機体——と人間の造る機械の、根本的な違いがある。そして单子論は、定足概念を根本に据えている以上、万物を有機体として取り扱はざるを得ない。そしてこれは同時に、单子論は、万物を生きているものとして、更には、心あるものとして、取り扱はざるを得ない。

得ない、という事を物語っている。

動物は生きている。植物も生きている。バクテリアもウイルスも生きている。細胞も生きている。精子も DNA も生きている。ここまで来ると、原子も生きている、と言わざるを得ない。そして更には、電子も光子も生きている。ニュートリノもクォークも生きている、と言わざるを得ない。どこかに線引きをすることは、全く不自然ではないのか。更にまた翻って、路傍の石ですら、生きている、と言えるのではないか。路傍の石は、叩けば反作用で抵抗し、持ち上げれば重さで抵抗し、持ち上げて手を離せば、一目散に大地に向かって逃げる（落下する）。それは全く、意志を持った生き物のようである。この種の事が、無限小の世界で、無限大に折り重なって起こっているのが、この宇宙なのである。したがって、万物は意志を持って生きている、と言うのに、何の抵抗もない。

以上のようにすれば、人体や動物を含めて、万物は機械である、とはとても言えないのではないか。デカルトのように、あえて、万物は機械である、と言いたいならば、万物は、無限小の大きさの無限大量の部品で出来た機械である、と言わねばならない。しかしこれは、「機械」という通常概念を越えている。「機械」の本来の概念からすれば、それは、有限な大きさの有限量の部品で出来ているもの、なのである。かくしてライブニッツの单子論は、必然的にアニミズムに至るのである⁽²⁾。

あえて言えば、ライブニッツの哲学においては、万物は、無限小の大きさの部分の無限大量の集積で出来ているのである。それは丁度、微分を積分して出来たようなものである。このように言うことの出来るライブニッツの哲学は、「微積分の形而上学」であるとも言えるであろう。

彼が微積分を発見したことと、彼が单子論の哲学を展開したこととの間に

は、深い内的関係があったのである。その底には、彼の、ゼロではないが有限でもない、生き物のような「無限小」という概念の発見があったのである。

- (1) ライプニッツはこう言っている。生物の有機的な身体は、それぞれ神的な機械もしくは自然的な自動機械とも言うべく、どんな人工的な自動機械よりも、無限に優れている。何故かと言えば、人間の技術で造った機械は、その一々の部分までは機械になっていない。例えば、真鍮で造った歯車の歯の部分もしくは断片は、我々から見ると、もう人工的なものではなく、その歯車の用途から考えても、一向に機械らしいところを示していない。ところが、自然の機械即ち生物の身体は、その最も小さい部分において、これを無限に分割していても、やはり機械になっている。これが、自然と技術との差異である。言いかえれば、神の技術と我々の技術との差異である。(『单子論』第64章)

注：機械論は、 Δx 、 Δy の段階で止まっている。しかしこれは、徹底的に考えるためには、極限にまで推し進めなくてはならない。そうすると、それらは、 dx 、 dy になる。かくして機械論は、有機体説になるのである。そして更には、万物には心がある、という所まで、進まねばならないであろう。これは必然の道である。

- (2) ライプニッツはこう言っている。宇宙には、未耕なところ不毛なところ生命のないところの一つも無く、混沌も無ければ混雑も無い。有ると思うのは外観だけである。(『单子論』第69章)

13.

ライプニッツには、「不可弁別者同一の原理」という思想がある⁽¹⁾。もし

不可弁別者（区別出来ない複数のもの）があるとすれば、それらは同一である、というのである。その心は、不可弁別者は存在しない、という事である。万物は相互に「可弁別者」である、というのである。一口で言えば、「万物不同」なのである。この宇宙には、同じものは存在しない、というのである。

二つの葉（AとB）が、空間的な位置以外は、全く同じであるとすれば、AとBを交換しても、この世は全く変わりはない。したがって、Aが今この木についている理由は、存在しない事になる。Aの代わりにBがついていてもよいのであるから。したがって、全く同じ二つの葉があるという事は、「十分な理由の原理」に反する。したがって、全く同じ二つの葉は存在しない。万物は可弁別なのである。したがって、万物には固有名をつける事が可能なのである。愛情に満ちた神は、万物に固有名をつけて、その行く末を見守っているのではないであろうか。ピュリダンのロバは存在しないのだ。

- (1) ライプニッツはこう言っている。各々の単子は、他の各々の単子とは異なっているはずである。実際自然の中において、二つの存在が互いに全く同じようであって、そこに内的差異、即ち、内的規定に基づく差異を認めることが出来ない、という事は決してない。（『単子論』第9章）二つの実体が全く相似て、ただ数においてだけ異なる、という事は真ではない。（『叙説』第9章）

注：「ただ数においてだけ異なる」とは、種としては同一で、個体としてのみ異なる、ということである。

おわりに

私の哲学は、カルナップの論理実証主義から始まった。それは世界を、感

覚を基礎として、論理的に構成しようとするものであった。しかしカルナップ自身、間もなく、それは不可能であると覺り、論理経験主義へと移って行った。そして私も、その後を追って、論理経験主義へと移って行った。それは、感覚ではなく、物言語で語られる経験を基礎として、世界を論理的に構成しようとするものである。しかし、感覚からにしろ経験からにしろ、下からの構成は結局は不可能であり、上からの仮説演繹法を前提にせざるを得なくなった。そして私は、そこに疑問を感じていた。理論命題と観察命題の関係が明らかでないのである。カルナップの流れをくむヘンペルは、橋渡し原理なるものを持ち出してこの問題を解決しようとしたが、これは如何にも形式的であり、事の真相を捉えているとはとても思えない。この問題を解決したのが、ふるくはデュエムであり、その後はハンソンであった。そのハンソンは、トゥールミン、クーン、ファイヤアーベントなどとともに、当時ニューウエーヴと言われた新しい科学哲学を展開していた。「概念の意味の理論依存性」(トゥールミン)、「観察の理論負荷性」(ハンソン)、「ルールに対するパラダイムの優先」「理論間の共役不可能性」「科学革命」(クーン)、「反帰納法」「反方法」(ファイヤアーベント)などといった事を主張する彼らの主張は、実に新鮮であった。そこには、全く新しい世界が開かれていた。ところが、彼らの主張には、ウイトゲンシュタインが数多く引用されていた。そこで私は、以前にもまして、ウイトゲンシュタインを熱心に読むようになった。しかし彼の哲学は、難解であった。特に彼の後期の哲学は、とらえどころがなかった。そんなおり、クリプキの後期ウイトゲンシュタイン解釈に関する画期的論文(後に、*Wittgenstein on Rules and Private Language*, Basil Blackwell, 1982として出版、ソールAクリプキ著、黒崎宏訳『ウイトゲンシュタインのパラドックス』産業図書1983としても翻訳出版)に出会い、

私のワイトゲンシュタイン像が定まった。そこにおいては、数理すらも言語ゲームとして下から理解されていたのである。

私は、一切を「言語ゲーム」として下から考えよう、と決心した。例えば、この私というものは、

the man who …

という記述によって与えられる存在であり、それ以上でも以下でもない。私という存在は、その意味で、全く言語的存在なのである。私なるものは、この who 以下に続くところの、言わば述語の総体なのである。そして私は、この観点から、大乘仏教の「空」の思想を理解しようと努めてきた。ところが最近、ライブニッツに「完足的概念」という思想がある事を知った。そしてこれは全く、私の求めていたものであった。そこで私は、それを展開した彼の『形而上学叙説』とその上に展開された彼の『单子論』を繰り返し読んで、ライブニッツの思想を、私なりに消化し再構成してみた。それが、この小論である。とはいえそれは、断想の域を出ていない。

ライブニッツの思想は、壮大な形而上学体系であり神学体系であるにも関わらず、ほとんどが、それぞれの機に応じそれぞれの相手に応じて、断片的にしか語られなかった。そこで語られたものは、劇作家が特定の役者を念頭に置いて書いた作品のような、言わば「当て書き」なのである。（『单子論』の念頭には、ライブニッツの熱烈なファンであったニコラ・レモンが、『叙説』の念頭には、当時高名であったフランスの哲学者アントワヌ・アルノーがいた。）そういうこともあって彼の作品には、どうも素直でないところがある。（『单子論』では、『叙説』であれほど中心的な役割を演じていた主語述語の関係が、影を潜めている。）整合的ではない、と思われるところもある。（例えば、神の单子に対する関係など。）なにせ彼自身が自分の思想を、

「多くの著しい逆説」（『叙説』第9章）と言っている位であるから。

最後に一言。以上見てきたように、ライプニッツの壮大な形而上学（神学）体系は、「全知全能にして愛に満ちた神の存在」を唯一の公理として、そこから論理的に演繹されてくる思想体系である、と思われる。問題は、その公理（ドグマ）を受け入れるか否か、である。「不動の動者」としての神を認めることは、それほど困難ではない。しかしそれが、全知全能はともかくとして、愛に満ちているとすること、即ち、そのような人格神であるとする事には、抵抗がある。17世紀のヨーロッパの精神風土においては、それは当然なことであったのであろう。しかし、なぜ不動の動者が、悪神でなく善神でなくてはならないのか。これは、ライプニッツ哲学の内部では解決できない外なる問題として、我々に残される。

ライプニッツの専門家ではない私の、この或る意味自由な小論が、ライプニッツに関する一つの試論として検討に値する事を願う。

補説——ライプニッツ著『弁神論——神の善意、人間の自由、悪の起源』による——

0.

私は、『ライプニッツ試論』を書き終えた後で、彼が『单子論』を書く機縁となった彼の名著『弁神論（テオディセー）』（佐々木能章訳、工作舎、上巻1990、下巻1991）を読んだ。実は『单子論』は、『弁神論』への注記の意味があるのである。注記を先に読むのは本末転倒ではあるが、なにせ『单子論』こそがライプニッツの主著である、と思われているので、自然とそうなったのである。そして結果的には、それでよかったのである。『弁神論』は、当時、宮廷のサロンなどで話題になっていた種々のテーマについての、時間無制限の長大な講演を聞いているようで、それ自体としては面白いが、ライプニッツ思想の核心は、結局は、『叙説』と『单子論』に集約されているのである。以下は、そのような『弁神論』を読んだの、『ライプニッツ試論』への若干の補足である。

1.

私はこう言った。我々はここに、ライプニッツの单子論が、図らずも、大乘仏教の縁起論の「空の思想」に通底する事を、見てとる事が出来る。（本論11）

これに対しライプニッツは、こう言っている。フォー（ブッダのこと）は、40年間自らの宗教を述べ伝えた後に、死期が近づいたと悟ると弟子たちに、

自分は陰喩のヴェールの下に真理を隠していた、そしてすべては、万物の第一原理として語ってきた無へと還元されるのだ、と宣言した。これは、アヴェロエス派の見解より一層悪いように思われる。どちらの学説も支持できないし、荒唐無稽ですらあるのだ…。(『弁神論』緒論第10章)

ライプニッツが大乘仏教、例えば『華嚴経』、更には、その中国における受容である華嚴宗の諸テキストに少しでも接していれば、彼の哲学はかなり変わっていたかもしれない。彼には、イエズス会の神父を介しての中国との接点があったのである。

『单子論』と大乘仏教の類似点を一つ挙げておこう。ライプニッツはこう言っている。すべての実体(单子)は、一つのまとまった世界のようなものであり、神の鏡もしくは全宇宙の鏡のようなものである。(本論10の注(2))

单子(実体)は全宇宙の鏡のようなものである、という事の心は、単子は全宇宙を自己の内に映している、という事である。これに対し大乘仏教では、例えば、華嚴宗の第三祖である法蔵が著した『華嚴五教章』では、「一塵に全宇宙が宿る」ということになる。詳しくは、竹村牧男著『華嚴とは何か』(春秋社、2004)238頁を参照。この両者の対応は、たまたまの偶然な相応ではなく、根本的な構造的な相似である、と思う。念のため、「一塵に全宇宙が宿る」ということが決して荒唐無稽ではないことを、以下において、私なりに示しておく。

一例をあげる。食卓の上に塵がある。食事をするので、それを拭いた。さて、その塵であるが、それは、遠く中国大陸で、上昇気流によって舞い上がり、偏西風に乗って飛んできたものである。そしてその上昇気流も偏西風も、地球規模のメカニズムで発生しているのであり、そのエネルギー源は太陽の熱である。その太陽は、我らが銀河系の一隅にあり、その銀河系は、他の多

くの銀河系の一つにすぎない。かくして、話は全宇宙に及ぶ。食卓上の一つの塵を理解しようとすれば、話は全宇宙に及ぶのである。食卓上の一つの塵の背後には全宇宙が控えているのである。食卓上の一つの塵には、意味上、全宇宙が含まれているのである。「一塵に全宇宙が宿る」のである。「意味上宿る」のである。

このことは、また、こうも理解できる。食卓の上に塵がある。今その塵をじっと見つめ、それ以外のものを全て消し去る。この食卓もこの部屋も、そして結局、この地球もこの宇宙も、じっと見つめているこの意識を唯一の例外として、私の身体をふくめて、全て消し去るのである。そうすると、そこに残ったその一塵は、「塵」という意味を失って、意味のわからない奇妙なXになってしまっているのではないか。したがって、一塵が一塵であるためには、その背後に、食卓から宇宙まで広がる背景がなくてはならないのである。一塵の中には、食卓から宇宙まで広がる広大な空間が、意味上、含まれているのである。「一塵に全宇宙が宿る」と言われるゆえんである。

私はよく子供のころ、学校で黒板の字を見ているとき、突如としてそれが無意味な模様に化けてしまう、という事を経験した。同じような経験をお持ちの方は、それを思い出していただくと、今の話はよく理解していただけると思う。

2.

私はこう言った。「意志の理由」は意志よりも前にある。その意味で、意志には自由はない。「自由意志」なるものは、存在しない。神において、意志は理由のしもべ（僕）なのである。そしてこれは、「十分な理由の原理」

の必然的結果である。(本論7の注(4)の注)

これに対してライプニッツは、こう言っている。意志が行動へと移行するのは、善の表象によってのみである。この善の表象は、それに反する表象よりも勝っている。神や善天使や極めて幸福なる魂について、人々は一致してこの見解を認めている。しかもそれらが依然として自由であることも、人々は認めている。神は、最善を選ばないわけにはいかないが、そうすることを強制されているのではない。神の選択の対象には、いささかも必然性は含まれていない。というのも、別の一連の事象も〔現実の事象と〕同じく可能だからである。このためにこそ、選択は自由で、必然性から独立したものとなるのである。なぜなら、選択は幾つかの可能的なもの間でなされるのであり、しかも意志は、対象が有する善さによってのみ、決定されるからである。(『弁神論』本論第45章)

ライプニッツの言う事も、それなりに理解できる。しかし、「最善観」を前提にする限り、「意志は、対象が有する善さによってのみ、決定される」以外にはありえない。ここにおいては、「選択の幅」を言う事は出来ても、「選択の自由」を言うことは空虚である、と思う。ここで「選択の自由」を言う事などに執着するいわれはないのではないか。

もし「選択の自由」を言いたければ、神においてではなく、われわれ人間においてであろう。選択を迫られる分かれ道に立ったとき、神は全てを見通しているから、迷わずその一方の道を選ぶ。否実、神はすでに宇宙創造の初めにおいて、その一方の道を選んでいたのである。神には迷いはない。したがって、ここにおいて「選択の自由」を言うことは空虚である。しかしわれわれ人間においては、不完全にしか見通しが利かないので、自己の責任において、その一方を選ぶよりほかに道はない。選択を迫られる分か

れ道に立った時、われわれ人間は迷い、しばし立ち止まって、主体的判断でその一方を選ぶのである。その意味でここには、仕方なしでの、消極的な意味での「選択の自由」はあるとは言える。しかしそれは、不十分な理由による、一種の賭けである。そして例えばその結果、凶らずも他人に不幸をもたらしたとすれば、それに対して私は、それ相応の責めを負わねばならないことになる。ここに神の出番はない。神は私を、そうなることを承知の上で、初めから不完全に造ったのであり、そうなったとしても、その上更にどうする事もしてくれない。神は、私を一度造ってしまえば、あとはそれを静かに見守るだけなのである。

それではあまりに救いのない話ではないか、と思われよう。そう言われれば、その通りである。しかし、不完全な被造物として造られたとしても、私は最善なる宇宙の一員なのであり、私の不完全性は、宇宙が全体そして最善となるために必要な不完全性なのである。そうだとすれば私は、自己の不完全性をそのまま受け入れねばならない。そしてこの覚悟が、神を受け入れる事に他ならないのではないか。

3.

弁神論とは、文字通りには、神を弁護する議論、ということである。では、神の何を弁護するのか。神は、最善の世界としてこの世を創造した、と言われる。それでは、何故この世に、こんなに悪がはびこっているのか。それは、神の力不足のせいではないのか。もしも神が真に全知全能であるとすれば、悪の無い理想的な世界を造る事が出来たのではないか。神は実は全知全能ではなかったのではないのか。

このような批判に対しては、私は、こう言って神を弁護すればよいと思う。そしてそれは、ライプニッツの真意に沿ったものである、と思う。

神は絶対者である。対を絶している者である。したがって神は、絶対者を創造する事が出来ない。もしも神が絶対者を創造するとすれば、その神は、もはや絶対者ではありえず、神としての存在を失うからである。したがって神が創造するもの——被造物——は、論理的に相対者であることになる。有限者であることになる。それは、いくら善意を持っていても有限者であり、凶らずも悪を犯すことがあり得る。悪を犯さないとしても、それはたまたま偶然の幸運な事であり、論理的には、悪を犯す可能性を排除出来ない。そしてこれが、いわゆる「悪の起源」についての論理的説明ではないのか。

ライプニッツは、こう言っている。[被造物の]働きの不完全性や欠陥は本源的な制限から生ずる。この制限は、被造物が存在を開始した当初から、その被造物を制限する観念的理由のために受け入れざるを得ぬものである。なぜなら神は、被造物にすべてを与えるわけにはいかないからである。もしすべてを与えたら別の神を仕立て上げることになってしまう。したがって、事物の完全性にはさまざまな程度があり、あらゆる種類の制限もなければならぬのである。(『弁神論』本論第31章)

神がこの宇宙を創造したとき、勿論その宇宙は、全体として最善であった。そして今も全体としては最善である。しかしその構成要素である個々の実体は、相対者であり有限者であって、最善なものとは言われない。そしてそこに、善の欠如としての悪が起り得るのである。したがってこの宇宙は、必然的に悪を含みながら、最善なのである。

ライプニッツは、こう言っている。人間は、間違いをするに依じて、自らが悪なる者だと感ずる。しかし神は、これらの小さな世界（人間）の欠陥の

すべてを、驚くべき仕方ですべての神の大世界の最大の装飾に転じてしまう。これは言わば、歪画法の発明である。歪画法においては、いくら美しい構図でも、それが正しい視点に関連づけられ、一定のガラス板や鏡によって見るのでないならば、混乱でしかない。それが部屋の飾りになるのは、然るべき所に置かれ、然るべく取り扱われたときだけである。こうして、我々の小さな世界においては一見歪んでいるものも、それは、大なる世界の美の中に再統合され、無限に完全な宇宙の原理の統一性に何ら背馳することはない。むしろ反対に、悪をより大なる善に役立たせる神の知恵に対して、一層大きな讃嘆をもたらすことになる。(『弁神論』本論第147章)

結局、こうである。神は絶対者であるからこそ、相対者しか造れない。ここに神の限界がある。そしてこれが、悪の起源となる。しかしこの悪は、神の造りし最善なる大世界における、最大の装飾なのである。

注：卓上に一枚の紙がある。そこに或る歪んだ顔の絵が描かれている。しかし、その紙の或る特定の場所に或る特定の円筒の鏡を置いて、或る特定の位置からその鏡を通して件の絵を見ると、そこに或る美人の顔が浮かび上がる。この場合の、その或る歪んだ顔を或る美人の顔に変換する仕方が、ライプニッツがここで言う「歪画法」であろう。

4.

私はこう言った。「ライプニッツはこう言っている。神は、知恵によって最善なものを知り、善意にとってこれを選び、勢力によってこれを生ずる。(『单子論』第55章)」(本論8) これに対応する『弁神論』の文章として、以下のようなものがある。

可能なるものが有する無限性は、それがどれほど大きなものであっても、神の知恵の無限性には及ばない。神は可能なものをすべて知っているからである。…神の知恵は、すべての可能的なものを包含しそれを精査し、比較し、相互に考量して、完全性もしくは不完全性の程度、強弱、善悪を見積もるが、それだけでは満足しない。それは有限なる結びつきを上回り、無限の結びつきを無限に作る。つまり、各々が無数の被造物を含むような宇宙の可能的系列を無数に作るのである。こうすることによって神の知恵は、それまで各々別々に検討していた可能的なものを、無限の宇宙体系の内に分配し、それぞれを比較する。これらをすべて比較し反省したところからの結果が、すべての可能な体系の中で最善なものの選択となり、こうして神の知恵は自らの善意を余すところなく満足される。以上がまさしく、現実的宇宙を作る計画なのである。彼の知恵のこうした働きのすべては、そこには働き相互の秩序と本性上の先行性はあるが、常に一緒に生じているのであり、時間的な先行性はそこにはない。(『弁神論』本論第225章)(アンダーラインは引用者による。)

ここで大切なことは、「時間的な先行性はそこにはない」という事である。神は先ず、無限に多くの時空的に無限な可能世界を想い描がき、それらを比較考量して、それらの中で最善なものを選ぶのであるが、彼はそれを無時間の中で行っているのである。可能世界を想い描かねば比較考量できず、比較考量しなければ、最善なものを選ぶことは出来ない。しかしこの順序は、論理的順序であって、時間的順序ではない。そもそも、宇宙が創造される以前は、時間も空間も存在しないのである。

5.

以下は、宇宙を創造する神についての、ライブニッツの興味深いコメントである。これをもって、この「補説」を終えることにする。

神は諸事物の第一の理由である。なぜなら、われわれが見たり経験したりするような制限されたものは、偶然的であって、[それらが或る意味] 必然的な存在 [である事] を説明するものを自らの内に有していないからである。…偶然的事物の総体的集まりである世界の存在の理由を求めねばならない。そしてその理由は、自分自身が存在する理由を自ら携えているような実体、それゆえ必然的にして永遠である実体 [(神)] の内に求めねばならない。また、このような原因 [(実体=神)] は叡智的でもなければならない。なぜなら、現に存在しているこの世界は偶然的なものであり、他の無数の世界もこの世界と同じように可能でそれと同じようにいわば存在へと向かっているのだから、無数の世界から一つを決定するためには、この世界の原因 [(実体=神)] はすべての可能世界を考慮しそれらと関連づけられていたのだけなければならないからである。現に存在する実体 [(この世界)] をこのように単なる可能性へと関連づけることができるのは、可能性についての観念を有する知性において他にはない。しかも、無限の可能的なものから一つだけを決定するのは、選択する意志の働きにほかならない。そしてその意志を実効的意志にするのが、かの実体 [(神)] の力能なのである。力能は有へと向かう。知恵や知性は真へ向かう。そして意志は善へ向かう。このような叡智的原因 [(実体=神)] はすべてのあり方を具えた無限なるものであり、力能と知恵と善意において完全であるはずである。なぜならこの原因 [(実体=神)] は可能なものなら何にでも向かうからである。すべては結び付いているのだから

ら、一つより多く原因 [(実体=神)] を認める必要はない。その知性は本質の源泉であり、その意志は存在の根源である。以上が、神の唯一性とその完全性、ならびに神による事物の根源のあり方について極く簡潔にまとめた証明である。(『弁神論』本論第7章) ([]は引用者による。)

念のために付言すると、この現実世界は、「可能世界の一つであった」という意味では偶然的であったが、「最善の世界である」という意味では、必然的に選ばれるわけであるから、必然的なのである。

ついでに、思い出を一つ。私は昔、ライプニッツ研究の日本における大先達であった下村寅太郎先生の講義に、モグリで出席した事があった。そのとき先生は、独特の声色で「西欧の哲学はすべてテオディセーである」とおっしゃった。これは、西欧の哲学の本質を鋭く言い当てた言葉として、今も私の耳の底に響いている。